市民タイムス　令和５年（2024年）1月25日

口差点（こうさてん）

一日も早い復興を

1日午後4時10分ごろ、パソコンに向かっていたら突然グラグラと横揺れがきた。いったん収まったのでテレビをつけると、アナウンサーが「津波が来ます、すぐ避難してください」と連呼する声が聞こえた。目にした映像は東日本大震災に迫る光景だった。そのうちに、石川県輪島市の朝市通り付近から火の手が上がり、見る見るうちに辺り一面が炎の海になった。「ええ？　こんなことが正月早々に起こるのか？」と思った。

能登半島は私にとって思い出の地の一つである。若い頃、職場の旅行で出掛けて、電車やバスで半島の先端まで行ったこと、朝市で海の幸や伝統工芸を堪能したことがよみがえる。家庭を持ってからはキャンプの道具を持参して子供たちと半島巡りをした。別名「軍艦島」と言われる見附島（みつけじま）近くの海岸でテントを張り、海水浴に興じた。今回の地震で島は大きく崩壊し、無残な姿になってしまった。

十数年前、地区役員をしていたとき、能登を訪れた。地震の爪痕を見て防災の在り方を考える研修だった。輪島市近郊の由緒ある大きな寺を見学したとき、山門がずれて、修復するのに億単位のお金がかかると言っていた。

やっと修復が終わったばかりのその寺が、壊滅状態でテレビに映し出された。再び修復するには相当な年月と費用がかかるだろう。一軒一軒の個人宅も同じだ。生活インフラの復旧も急がれる。私ができることは何かと思いながら、一日も早い復興を願って、わずかであるが義援金を送った。

（安曇野市穂高、荻原義重、79歳）